
HIKARI (光) 特別編 エピソード0 ～初めの一人～

宇宙の彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H I K A R I (光) 特別編 エピソード0 〈初めの一人〉

【Nコード】

N 0 9 3 3 N

【作者名】

宇宙の彼方

【あらすじ】

——「今、お前がいる地球は、数えて25代目の地球なんじゃ」
——「てかさあ、何なんだよ？ 25代目って」
——「って事は、今度は俺達がガジャルを封印しないといけないのか？」

H I K A R I (光) 第1話へと続くエピソード0。

知られざる過去と、真実が交錯し、運命に翻弄される一人の青年の物語。

初めて、この作品に触れる方にも分かりやすい展開。
本編を御覧になられている方々には、更に深い真実が語られています。

主人公の人間臭さ、葛藤を描きながら成長してゆく姿に、どこか共感されれば嬉しいです。

前編（前書き）

知られざるビフォーストーリー。

エピソード0。

ちなみに、エピソード0、5と言うのも存在し、それを経て第1話へと繋がります。

前編

今生きている毎日が当たり前だと思っていた。

この生活がいつまでも続き、学校を卒業し大学へ進学し、社会人になる。

そして……。

そんな未来が自分にも用意されていると信じていた。

しかし……。

運命と言うモノは、全く予想もしない未来へと突き進む。

その先にあるモノとは……。

H I K A R I (光) 特別編 エピソード0 〽初めの一人〽

教室のスピーカーから、授業が終わる鐘の音が鳴り響いた。

大きな黒板に書き込まれた数式を、しっかりとノートに写し終えると、寺村^{てらむら}蓮^{れん}は、手さげカバンを肩に担ぎ学校を後にした。

ブレザーから、シャツの裾^{すそ}を少し出し、スプレーワックスで髪をナチュラルに立たせている、至って『普通』の十七歳の青年。

レンが家に向かって歩いていると、高架下のトンネル内で『手相占い』を商いとしている人を見かけた。

薄汚れた茶褐色のフードを被^{かぶ}った白髪の老人。

その男が、レンを見つけると声を掛けて来た。

「おい、その者。お主に大きな使命が見えるぞ。良ければ手相を見てやろう」

手招きしながら、半ば強引にレンを古い木製の椅子に座らせる。

「いや、別に良いって」

レンは、老人の強引さに押され、たじろぎながらも、脚がガタつく丸椅子に腰を下ろした。

老人は、レンの左手を掴むと、手の平を表に向けた。そして、手相を読み解こうと指でなぞる。

「ほお。ほおー。へええ……。んー」

フードの老人は、ワザとらしく声を上げ、本当に手相を読み解けるようには見えなかった。

レンは、不安になり手を引っ込めようとした。が、老人はその手を離さなかった。

「おいっ、離せよ。何なんだよお前？」

すると、老人はレンの掌に直径五センチ程の透明な水晶玉をトンと乗せた。

透き通る程に美しく、手にしっかりと馴染む水晶玉。

だが、レンは水晶玉と老人の手を振り払い、その場から立ち上がった。

「またお前か。昨日は、ホームレスだったり、その前は、チラシ配り。事あるごとに俺に水晶玉を渡そうとしやがって。俺は絶対に買わねえぞ。そんな金あるか!!!」

「それはお前のじゃ!!! 金などいらん」

「そんな事言って、後で多額の請求書が家に届くんだろ?」

老人の必死な言葉を跳ね返すレン。

レンは、新手の悪徳商法だと思っていた。

以前に、母親がそう言った類の悪徳商法に引っかかって頭を悩ませていた事があったからだ。

「じゃったら、お前が見る夢は？」

その言葉にレンは、思い当たる節があるのか言葉が止まった。やっとの思いで訊ねる事が出来た言葉。

レンの動揺する姿を目の当たりにし、手応えを感じたのか？ 老人は、期待に高鳴る胸を抑えつけ、冷静を装った。

「そうさ。あの夢だ。2人の男女の夢だ。男の足にしがみ付き泣き叫ぶ女。女を諭し、負の連鎖を食い止めようとする男の夢だ」

「大地と瑠璃香……」

レンは、老人が言う男女の名を口ずさんだ。その男女が誰なのかを知っている。

最近になって頻繁に同じ夢を見るからだ。

老人は、レンの反応に確信を持った。

喜びと同時に涙を流し、肩を震わせ膝から崩れ落ちた。

「やっとな……、やっとな出会った。やっとな……」

レンは、大の大人が、公衆の面前で泣きじゃくる姿に狼狽しながらも訊ねた。

「何で……俺なんかに。しかも、『やっとな』って？」

「どれだけ経ったかは分からん、ただ、この地球に文明を持った人間が現れた時からお前を探しておったんじゃない」

「はあ？ 何言ってるの？」

老人が発した馬鹿げた言葉に鼻で笑ったレン。

すると、老人は唐突に訊ねた。

「お前、『前世』とかに興味はあるか？」

「いや、別に無いし、そんなの信じてない」

「ワシは、お前の前世を知っておる」

「はあ？ 正気か？」

老人は、鼻っから信じようとしないうの態度を気に留める事も無く、アスファルトの上で、確かな存在感を放つ水晶玉を拾い上げ

ると、レンの掌に乗せた。

「これは、お前の前世。『白瀬^{しらせ}海馬^{かいま}』がお前の為に残した力の結晶だ」

あまりにも荒唐無稽な主張に、目の前の老人は精神的な病気なんだと感じ始めたレンは、隙^{すき}を見つけて、話を切り上げようと考えた。

その時。

レンの手の上の水晶玉が白い光を帯び出した。

淡いオーラが水晶玉に纏わり付き、次の瞬間には凄まじい閃光を放った。

「なっ、何だコレ!？」

説明の付かない現象に、驚愕するレンは、夢ではないか? と、目を擦った。

しかし、夢では無かった。

序々に弱まる光の向こう側で、顔を綻ばせる老人が見えた。

「久しぶりに会えたスピリットも大いに喜んでおる」

「スピリット?」

「そうじゃ。さっきも言った、お前の前世が残した力の結晶。そして、お前が『ファーストスピリット』じゃ」

「なんなんだよ? さっきから、何とかスピリットとか……」

「ファーストスピリットには特別な使命がある」

「使命?」

言葉を繰り返すレン。

「スピリットと、その生まれ変わりはお前を含めて5人いる。お前がファーストとなり、残りの4人とスピリットを探し出すのだ」

「ちょっと待てよ。一体何の為に?」

レンは、目まぐるしく突き進む話の展開に待ったを掛けた。

すると、老人も、その質問には慎重になり、制止した。

「それは、ここでは話せん。誰が聞いておるかわからんからなあ」
そう言って誰かに見られていないかトンネルの出入り口に目をやった老人の視線を追う。

誰にも見られていないと安心した老人は、レンに最後の質問を投げかけた。

「真実を知りたくば、ワシと共に来るのじゃ。だが、その時点で後戻りはできぬ。さあ、どうする？」

真剣な眼差しをレンに向ける老人。

レンは、この申し出を受け入れれば、もう元の生活には戻れないだろうと感じた。

だが、真実を知りたかった。

これだけの謎を残されて、おいそれと引き下がるのは性に合わない。

大きく深呼吸し、気持ちを整理し、レンは答えた。

「わかった。行くよ」

「そう言うと思っておった。ならば来るのじゃ」

レンは、トンネルの出口へと歩く老人の後を着いて歩いた。

暗いトンネルの先に見える光の出口。

円形の出口から差し込む白い光が丸く見える。

まるで、スピリットへと向かっているような……。

人目につかない路地裏へとやって来たレンと老人。

レンは、何処へ連れて行かれるのか不安に成りつつも、ここで引き下がる気にもならなかった。

「よし、この辺で良いじゃろ」

老人は、雑居ビルの裏路地で歩みを止めると、懷から青い水晶玉

のような球体を取り出した。

「それはアンタのスピリットってヤツなのかい？」

「いやあ」

老人は、意味有りげに否定すると、レンを球体越しに覗きながら答えた。

「これは『スフィア』と呼ばれている物だ」

「スフィア？」

青いスフィアを覗き込むレンから、スフィアを離した老人は、勢い良く空に向かって放り投げた。

その行方を目で追う二人。

スフィアは、上空十メートル程へと達すると、青白い閃光を放ちバチンと爆散した。

弾け飛んだスフィアの破片が、空中で文字を描き始める。

そして、瞬く間に、直径五メートル程の光の魔方陣を作り上げると、レンの前に光のサークルを降下させた。

アスファルトに叩きつけられたサークルから風が駆け抜け、レンと老人を包み込む。

「百聞は一見にしかずじゃ。入ってみい」

レンへ、サークルの中に入るよう促す老人。

「ええッ」

レンは、不気味に思いながらも、ゆっくりと近づいた。

目の前の信じられない光景が今日、初めての経験ならまず入らないだろう。しかし、今日は、信じられない光景をいくつも目の当たりにしている。

こうして、人は、あらゆる経験に麻痺してゆくんだとレンは心の片隅で思った。

そして、レンはサークルの中に入った。

途端に、心地よい風が全身を包み込み、気付いた時には、雲を突

き抜けていた。

目の前の信じられない絶景に言葉を失ったのも束の間、次の瞬間には、チタン製のような大型の円盤台の上に立っていた。

「ここは何処だ？」

あしもと
足許から噴出す白い煙の中、状況を掴もうと、慌てて視線を四方八方に駆け巡らせる。

白衣を着た研究者達が、忙しなく見たこともない機械に向かって黙々と作業をしている。

その巨大な研究所の中央、研究者達が囲むように、レンが立っている円盤台がポツリと存在していた。

円盤台から伸びる無数のコードや配管が見える。それぞれに取り付けられているメータを、研究者達はデータを取り、報告を上げていた。

「ここが、希望の要塞『フォースライド』じゃ」

レンの後ろに現れた老人がレンの肩を叩いた。

ポカンと開いた口を、レンは塞ぐ事が出来なかった。

想像を絶する状況に陥ると、人間は思考回路が停止してしまうのだと、レンはこの時初めて経験した。

「お前、今の地球が何代目か知っておるか？」

老人は、クリスタル製の大きな会議用のテーブルに両肘を付きながら訊ねてきた、

「あつ、さあ……。てか何代目っておかしくない？」

レンは、そう答えたが、それよりも、窓から見える景色に言葉を失っていた。

――月が見える。星も。

それは、額縁が設けられた絵画でもなく、窓の外には本物の宇宙が存在しているのだ。

あのサークルに入って、一瞬にして宇宙ステーションにでも来てしまったのか？

そんな事を思いながら、ぼんやりと宇宙を眺めていると、老人がレンの頭を軽く叩いた。

我に返り、いきなりの攻撃に憤慨したレン。

「何すんだよジジイッ!!」

「ワシの話を全く聞いておらんかったからじゃろうが。今は、退屈でも必ず知っておかねばならんのだぞ」

「はいはい、分かったよ」

レンが、クリスタル製の椅子の上で姿勢を正すと、老人は話をもう一度始めた。

「今、お前がいる地球は、数えて25代目の地球なんじゃ」

「てかさあ、何なんだよ？ 25代目って」

レンは、信憑性の欠片もない話に、体の力が抜け、姿勢を崩した。

「この世界とは、お前がいる地球の常識を遥かに上回っているって事じゃ。小さな定規では限界がある」

老人は、白髪混じりの眉を細めると窓の外へと目をやった。

「地球と言うのは、神が作りし実験体の一つじゃ。同じ歴史と文明を繰り返し与え、色々な運命で崩壊、壊滅、どのように繁栄してくのかを見定める」

レンは、話の間に入る余地も無かった。それ程に、老人が話す内容は、レンが知っている常識を凌駕していたのだ。

「時には、文明のメルトダウン。地球の寿命、隕石の衝突。異星人との戦争、そして占領。数々の終わりが繰り返され、その度に地球は生まれ変わり、今の25代目に辿り着いたのじゃ」

老人の話にレンは不思議に思った事があった。

「あのさあ、テレビで見たんだけど、太陽も月もさあ、地球と同時期に生まれただよなあ？」

「そうじゃ。地球が25代目と言ったが、宇宙も25代目なんじゃ。一回の宇宙に一つの地球。神は、宇宙の始まりから終わりまでを1回としていたようなのじゃ」

「でも、なんで、そんな『神』の事を知ってるんだ？ 見たことあるのかよ？」

レンは、胸の前で腕を組み、深々と呼吸をした。

「お前の前世達が、一度神の住む世界に行った事がある。その話を聞いたのじゃ」

「へええ……スゲェ」

レンは、小馬鹿にした態度を取った。

「おっと、話がだいぶ逸れてしまったようじゃの。宇宙の勉強を教えているのではない」

そう言うと、老人は改まり、核となる事実を語り始めた。

「全ての始まりは、23代目の地球での事。当時の地球も、今と同じくらい文明が発達しておった。だが、環境破壊は、今の地球よりも酷かった。古来より培われて来た資源を全て使い果たし、地球温暖化も激しさを増し、南北の水河地帯は消滅。海面上昇によっての大地の浸水。地球が、人間の住めなくなる星になるのは時間の問題じゃった。そんな中、一つの団体が地球を救おうと、政府や、合衆国に声明を送り続けていた。それが『セラヴィスク教』」

「セラヴィスク教？」

レンは、舌がもつれそうになりながらも繰り返した。

「まあ、宗教団体の一派じゃ。またゲラヴィスク教は、不思議な力を使うとも噂されており、彼等を崇める人間も大勢いた。だが、全く彼等の話を聞き入れず、己の私利私欲のために、世界を動かそうとする人間達に対し、ゲラヴィスク教は嘆き悲しみ、遂には再生の神『ガジャル』に最後の希望を夢見て、目覚めさせようと考え出したのじゃ」

——ガジャル。

その言葉をレンは夢で知っていた。

「夢の中の男が最後に叫んでました。『ガジャル』って」

「そうじゃ。当時、ゲラヴィスク教の中で、救世主とまで言われた一人の男がいた。その名を『セラス』。ずば抜けた力を持っておった彼は、再生の神である『ガジャル』を甦らせたのだ。じゃが、ガジャルは、ゲラヴィスク教達が思い込んでいた神とは違った。再生の意味は、世界の破壊だったのだ」

「それで、23代目の地球は滅んだのか？」

レンの問いかけに老人は顔を左右に振った。

「あと一步で、地球が消えかけた時、5人の救世主が現れた。彼等は、ガジャルを倒そうと、必死に戦った。凄まじい戦いが長く続いた。じゃが、5人は、ガジャルをこの世から消す事が不可能だと悟ったのじゃ。最後に残された手段は封印しかなかった」

「出来たのか？」

「まあな。しかし、あくまで『封印』じゃ。いつかは破れる。当時の地球が無くなり、封印の効力が消えれば、再びガジャルの猛威が繰り返される。だから、彼等は、自分達の力を結晶にし、『スピリット』と名づけた。そして、自分達の生まれ変わりが現れた時、同時にスピリットが各地の遺跡に現れるように特殊な魔法を掛けたのじゃ。再び、ガジャルを封印させるために。そして、24代目の地

球はその生まれ変わりによって守られた」

「それって……」

レンの感が確かならば、答えは夢の中にあるのだろう。

そして、その感は間違っていなかった。

「お前の夢に登場した者達だ。その中に、君の前世もいた」

「って事は、今度は俺達がガジラルを封印しないといけないのか？」

「そうじゃ」

老人はあっさりと答えたが、それが逆にレンの感情を逆撫でした。

「ふざけんなッ！！　それが本当なら、出来る訳ないだろ。俺は、普通の高校生だぜ。格闘技も習ってないし、喧嘩も自分から避ける性質^{たち}なんだ。普通に考えても無理だろ？」

レンは、勢い良く立ち上がった。反動でクリスタルの椅子が横転し、重く高い音を発した。

「前世の君も、同じ事を言っていた。彼等も皆、普通の学生じゃった。じゃが、皆には守る物があった。絆も。そしてスピリットが……。心を解き放ち、スピリットと同化すれば、大切な物を守る事が出来る大きな力が湧き上がる」

「俺には、そんな力なんて無いよ」

レンは、俯き加減に呟いた。

強く握った拳が、彼の中に有る暗い記憶を物語っていた。

「一人では、無理じゃな。その為に仲間がいるのじゃ。今はまだおらんがな。お前が集めるんじゃ、4人を」

そう言って、老人は再び、テーブルの上にスピリットを置いた。

「これが、輝いたのはお前が前世の生まれ変わりである証。そしてファーストスピリットじゃ」

レンは、スピリットをそっと掴むと、見えぬ答えを求める様に覗

き込んだ。

——自分がすべき事。できる事。

——大切な人を守れるのか？

押し潰されそうなような不安、先の見えない恐怖が、今のレンの八割を占めていた。

だが、残りの二割には、希望と夢があった。

確かに、荒唐無稽な話の上に破綻し過ぎだ。

誰がこんな馬鹿げた話を信じるだろうか？

だが、今のレンは心のどこかで、その滑稽な事実が常識に変わっていく事実に気が付き始めていた。

——夢が語る真実。

それを見ていると言う事は、自分には天命があるのかも知れない。

理由は、まだハッキリとはしないけどそう信じたい。レンは、そう思ったのだ。

そして、レンは、長い沈黙の後、これまでの現実には『さよなら』をした。

レンの胸を老人の肘が弾いた。
後方に吹き飛び咽るレン。

「ほれ、防御をせんか。防御じゃ」

「クッ……言われなくても」

フォースライド内にある『トレーニングルーム』で闘いの基礎を教え込まれていたレン。

喧嘩もろくにした事が無かったのに、いきなりの本格的なバトルテクニクに手も足も付いていなかった。

まるで、アクション映画の主役のような拳法を巧みにこなし、レンを翻弄する老人の動きは、見た目の年齢など宛てにはならなかった。

老人の突き出した拳を、クロスガードで防ごうとしたレン。だが、次の瞬間には、足をすくわれ尻からダウンしていた。

蹴り出された足を、膝で受けようとした瞬間に、左即頭部に踵落としを入れられていた。

意を決して飛び掛ったレンを、老人の気合と共に掌から発せられた波動が弾き返した。

呼吸荒げに、額を伝い、細い顎から大粒の汗が垂れる。

「爺さん何者なんだよ？ 本当に爺さんか？」

すると、老人は汗一つ流さずに答えた。

「ワシは、サイボーグじゃ」

「えっ！？ マジ」

老人は二つの瞳を赤く光らせ、レンに正体を明かした。

驚くレンに、老人はニコリと笑った。

「お前の前世に闘い方を教えたのもワシじゃ。当時は生身だったがな。君等に会う為に、臓器をメカニクし、超冷凍で最近まで眠ってたんじゃない」

「何の為に？」

「誰かが、引っ張らなければ、ファーストスピリットも何をすれば良いか分からんじゃない？ 言わば案内人じゃ」

そう軽々しく口にした老人だったが、レンは、心が急に苦しくなった。

自分を犠牲にしてまで、レン達の為に力を尽くそうとしている。本当は怖かったはずだ。

全てに別れを告げ、永遠の眠り付く事が。

だからこそ、自分に何が出来たのか？ それは、彼の期待を裏切らない事だろう。

「ところで爺さん名前は？」

「スー・メイセン。君の前世達は、『スーちゃん』と呼んでたよ」

「スーちゃんか」

その見た目のギャップと、ネーミングの響きが滑稽だった。

クスリと笑ったレン。

そして、また、トレーニングが始まった。

レンが家に帰ったのは、いつもより四時間も遅れていた。

もう、家族は、風呂を上がり団欒している頃だろう。

築年数の古そうな平屋へと帰ってきたレンは、居間の引き戸を開けた。

「ただいまあ」

すると、目の前には、ちゃぶ台で酒を煽る父親と、居間の隅で小さくなる母親、そして、高校一年の妹がいた。

二人が怯えた視線をレンに向ける。

レンはその視線を受け、父に目をやった。

かなり酔っている。

レンの父親は、酒が入ると大人しく温和な性格から、暴力的な父

へと豹変するのである。

「また、酔っ払ってんのかよ」

レンは、手に持っていたカバンを畳みに叩き付けた。

「悪いのか？ 俺は今、良い気分なんだよ、それなのに何でテメエに邪魔されなきゃいけないんだッ！！」

暴言と同時に、口の中の酒と唾液が、父の無精髭の間をすり抜ける。

「誰のお陰で飯食えてると思ってるんだ馬鹿野郎があ」

レンの父親は、口を開けばいつもこの言葉が出る。特に一度酔っ払うと念仏のように繰り返すのだ。

レンは、大きく溜息を付くと、隣の部屋に着替えに向かった。

すると、暫くして、妹と母親の悲鳴が家中に鳴り響いた。

レンが慌てて居間へ現れると、目の前で酒に酔った父が、妹に覆いかぶさり、拳で顔を殴っていたのである。

「美奈子もエエ女になりやがって、俺が男を教えてやるかあ！！」
と、泣き叫ぶ妹の服を無理やり脱がそうとしていたのである。

それを必死に妨害する母。

そんな母の顔面に父は前蹴りを食らわせ、大きく仰け反った母は、タンスの角で頭を打ち付けた。

その光景に激怒したレンは、父親の胸ぐらを掴み上げた。

「テメエ、何やってんだ！！ 糞野郎ッ！！」

「親に手上げるのかあ？ 誰に飯食わせて貰ってんだ？ 馬鹿野郎！！」

「飯くらい、俺がアルバイト代で食わせてやるよ、母さんと美奈子に。だから、テメエは、もう消えろッ！！」

レンは、大きく掲げた拳を父親の鼻先に打ち込んだ。

鈍い音とともに、父親の鼻からどす黒い血が流れる。

ずっと、母親と妹を守れずに、自分も小さな頃から父親に暴力を振るわれていた。涙を流し、腫れた頭で母親の許で泣きじゃくって

いた。

そんな記憶がレンの中での『暗い記憶』として、深く根付いていた。

病弱な母には仕事も出来ず、父がいなければ食べて行く事も出来なかったからだ。

だが、もうそんな事はどうでも良かった。

いままでの恨みが、憎しみがレンの拳の痛みを麻痺させていた。

何度も。

何度も殴り続けた。

何度も。

何度も血飛沫ちしぶきが散った。

母親と妹がレンの両脇を引っ張り上げ、止めようとする。

遠くに聞こえる二人の声……「もう止めてええ」……「死んじやう」

その時、レンは思った。

コレは、正しい事なのか？

復讐……。

父親に手を上げた事が……。

レンは、赤く染まる拳に目をやった。

「俺は……」

——何やってんだ？

レンは、そう言うのと、意識も朦朧とする中、家を飛び出した。

近くの公園へと走ってきたレン。

荒い呼吸で、トイレへ駆け込み、洗面台で血に染まる手を洗い流す。

「スカッとしたか？」

その声に振り返るレンの前にスーがいた。

「もしかして見てた？」

「まじまじとな」

「見ただろ？ 俺、あの時、復讐に駆られた悪だった。そんな俺が正義の為に人を救える訳が無い」

「確かに、親に手を上げた事は賛成し兼ねる。しかし、お前は母親や妹を守ろうとした。それは間違っていない」

俯くレンに、スーは続けた。

「良いか？ 強くなる為の一番の力は悪の力だ」

「えっ？」

レンは耳を疑った。大切な人達を守ろうと言っていたスーが悪を正当化しようとしたからだ。

「勘違いするなよ。悪の力が無ければ人は強くなれん。誰かを救う為には仇となる相手への復讐心がある。だからどんな人間にでも悪の力はあるのじゃ。ただ、肝心なのはそれに己が飲み込まれるかどうかだ。だからこそ、光の心で包み込む。悪の力を利用し正義の心で浄化する。それが大事なのだよ」

「悪の力を利用し正義の心で浄化する……」

レンは、その言葉を自分への教訓のように繰り返した。

「ブラーボー」

その時、二人の会話を割って入る者が拍手をしながら近づいて来た。

暗闇へと目を凝らす二人。

その声の主が何者なのか気付いたスーはレンに警告した。

「早く逃げろ！！」

「えっ！？」

「もう遅いよ」

闇から聞こえる陽気な声。

公園の出口へと向かおうとしたレンだったが、出入り口を不気味な男女が封鎖していた。

老若男女が、虚ろな瞳を投げかけ、垂れた首はそのままに、口からは粘性の高い唾液が糸を引いていた。

力なく縛れる足で器用に立ちながら、喉の奥から掠れた呻き声を上げている。

レンが感じる不気味な違和感。それはどう見ても『人』から発せられるモノでは無かった。

狂気と冷静さが入り混じった……対極する感情が無理に調和を取ろうとしているような。

「何なんだよ、お前等？」

「もう彼等は人じゃない」

「人じゃないって？」

「操られている」

「誰に？」

慌て問い続けるレンの前に、漆黒のローブを全身に纏い、白い満面の笑みを表現した仮面を付けた男が現れた。

スーがその男を見て答えた。

「ゲラヴィスク教じゃ……」

「コイツが、ゲラヴィスク教!？」

初めて見る不気味な仮面の男。

全身を貫く邪悪な気配。

「じゃあ、今から君達を殺すね。ファーストスピリットは此処で消して置かないと」

白い仮面がそう言うと、ローブの袖から色白の手が顔を見せた。二人に向けられた掌から、今まさに、邪悪なエネルギーが放たれ

ようとしていた。

中編へ続く。

中編

ローブの男がキレの良い気合を入れると、レンとスーに向けていた掌から紫電が放出された。

スパークが乱れる紫電の前に飛び出したスーは、レンの前へ立ちはだかり突き出した両手から青白い光の放射を放った。

二本のエネルギーが衝突し炸裂音と共に、辺りが閃光に包まれる。

歯を食いしばり、押されないように踏ん張るスーの後ろで、地面に蹲り耳を押さえ顔を伏せているレン。

恐怖に駆られた呻き声が木霊した。

SF映画のような信じられない光景だったが、そんなモノに見とれている場合では無い程の危険性が目に見えたのだ。

二色のエネルギーの衝突点から、不規則に弾け飛ぶ光が公園の地面を削り、遊具の鉄骨を溶かす。

そんなモノが体に直撃すれば、どうなるかくらいは想像が付く。

ローブの男は、心地よい風にも当たっているような表情で、ゆっくりと口元を綻ばせた。

「やるじゃんかよ、お爺さん」

スーは、掌に返る圧力に押されながらも口を開いた。

「まだ負けんよ」

スーが被る茶色のフードが脱げ、首下で勢い良く靡く。

負けん気は人一倍のスーだったが、力の差は、砂の地面に刻まれた自分の足跡が物語っていた。

ジリジリと後方へ押されてゆくスー。

スーの額から流れる汗が、風圧に飛ばされ、弾き飛ぶスパークに当り蒸発する。

「おい、爺さん。それは本物の『汗』かい？　それとも『オイル』かい？」

薄ら笑いを浮かべるローブの男は、スーの正体を既に見抜いていた。

「本物の汗じゃよ」

「はは、なら良かった」

その意味深な言葉に、眉を潜めたスー。

そして、次の瞬間、エネルギーの放射がスーを飲み込んだ。

地面に大きな傷痕を残し、スーは公衆便所へと突っ込み、エネルギーと共に爆煙を上げた。

レンは、衝撃に吹き飛ばされ、公園の出入口へと転んだ。

白い仮面が先ほどと変わらない笑みを見せる。

その掌から、白い煙が緩やかに立ち昇っていた。

「からくり人形め」

そう言うと、ローブの男は、怯えるレンに近づいた。

次は自分が殺される。

その恐怖から、必死に足をバタつかせ後退りするが、背中に、不気味な男の脚が当たった。その男が垂らす唾液が、レンの額を弾いた。

自分を見下ろしているのか？　ただ地面の眺めているのか？　虚

ろな双眼が捕らえるモノは、誰にも解らない。

次の瞬間、レンの胸部に鋭い痛みが走った。

一瞬何が起きたのか解らず、虚ろな目をした男から自分の胸に目をやった。

ローブの男が握る剣が、レンの胸に深く突き刺さっていた。

それでもレンは、一体何が起きているのか、理解に苦しんだ。

自分の胸に突き刺さる剣。

「俺……死ぬ？」　「いや、でもそんなに痛くないし」　「あつ、でも何だか痛い……」

当たり前だが初めての経験。

死に近づく感覚を初めて記憶するのだ。

不規則に鼓動する心臓の音が全身に伝わり、脈に合わせて鋭い痛みが体内を駆け巡る。

そして、体の芯からメンソールに浸されたような、冷たく、寒い感覚が、痛みを多い尽くす。

「これが『死』なのか……」とレンは、掠れ行く意識の中でそう思った。

瓦礫の山から這い出てきたスー。

フードは破れ、年老いた体が現れる。

一見、普通の人間のような体だが、腹部から突き出た肋骨は、人が持つカルシウム素材とは全く異なる物だった。

「ああああッ!!」

目の前で、レンの胸に突き刺さった剣を見て、状況を整理できず声が出なかった本人に変わり、スーが断末魔を上げた。

スーの方へ顔を向けた白い仮面。

満面の笑みの仮面を外しても、きつと同じ無邪気な顔をしているだろう。

「ふう、これで終わりか。呆気なかったな」

ローブの男がそう言った時、レンのズボンのポケットから、白い閃光が発生し、辺りを包み込んだ。

あまりの眩さに、顔を伏せたローブの男。

「なんだコレは!？」

「始まった……」

スーは、眼球の中の望遠レンズを小刻みに動かし、光の中のモノを捉えようとした。

少しずつ弱まる光の中、胸を張り、拳を硬く握ったレンが勇ましい姿で立っていた。

その姿に驚くローブの男。

剣に刺された傷口は塞がり、凜とした表情からはレンが発する雰囲気と違う物が滲み出ていた。

「誰だ？」

「レント」

ローブの男に冷たく返すレント。

「レント？ ……初代の記憶か。2代目の記憶ではなく……何故だ……」

スーは、スピリットの記憶は、2代目の海馬の物だと思っていた。

公園での騒がしい出来事に、隣のオフィスビルの窓が開いた。

被爆地帯のようになってしまった公園を見下ろし、驚くサラリーマン。

ローブの男が、見下ろすサラリーマンに気付くと、腕を上げ、軽く手招いた。

すると、男は不思議な力に引き寄せられるかの様に、窓の外に引っ張られ、暫くすると湿った木が折れるような音を鳴らした。

「どうして殺した？」

「さあ。お前、目の前に蚊が飛んでいたらどうする？ そう言ったモノだ」

ローブの男は、如何にも当たり前前の事だと言わんばかりに、レントの顔を下から舐めるように覗き込んだ。

レントは、下から見上げるローブの男へ、ゆっくりと視線を下ろした。

「だったら。お前は蚊だな」

「なんだとおッ！？」

怒声を上げた白い仮面を、レントの裏拳が貫ぬく。

一瞬の出来事に、ローブの男はよろめいて、腰から地面に崩れ落ちた。

乾いた破裂音と共に真っ二つに裂けた仮面から、血に染まる男の顔が現れる。どうやら鼻の骨が砕けたようだ。

涙目になる男は、鼻を手で押さえながらゆっくりと立ち上がった。

「この野郎ッ！！ 許せねえ！！」

ローブの男が、紫電を放とうと再び腕を突き出した。が、瞬時に距離を詰めたレントは、突き出された腕の肘へ、逆から強烈なパンチを入れてへし折った。

ローブの男の苦痛にもがく叫び声が公園に響いた。

普通なら曲がる事の無い角度へと力なく曲がる腕を見て、発狂しかけているローブの男。

だが、レントの攻撃は、まだ治まらなかった。

膝蹴りで男の歯を全てへし折り、倒れた所へ、脇腹を何度も蹴った。

「おらおらどうした。俺は全然力使ってないぜ。本気出せよ雑魚が」

ローブの男は、何度も脇腹を蹴られ口から血を吐き、白目を向いていた。

周りにいた、普通でない者達は、ご主人様を助けようとする命令が残っていたのか？ ふら付く足許で、遠くを見ながら近づいてきた。

「邪魔だどけッ」

レントは、突き出した掌から衝撃波を発し、近寄る者達を公園の向かい側の塀に叩き付けた。

邪魔者が消えてから、レントはローブの男に問いかけた。

「おい、セラスはどこだ？ もう生まれ変わっているだろ？」

ローブの男は、必死に答えようとしたが、歯が全て無い上に、アバラ骨が砕け、肺を突き破っていた事から、まともに話せる状況では無かった。

「ひら、ない……お、れは、ひら……ない」
「そうか」

次の瞬間、男の断末魔が鳴り響き、同時に普通では無い者達も意識を失った。

目標を失い、立ち尽くすレント。

そこへ、近づくスー。

「お前は、初代の記憶だな」

「あんたは？」

「ワシはアンドロイドのスーじゃ」

「アンドロイド？」

「お前の生まれ変わりを探し出し、導く。それがワシの使命じゃ」
「なるほど」

レントは、そう言いながら、今現在のレンの肉体に目をやり、拳を握ったり開いたりしている。

「この男は中々の素質がある。さすが俺の生まれ変わりだ……だが、まだ足りないモノもある」

そして、レントは、スーにある事を伝えた。

「なあ、今回の戦いがある程度有利に進めたいのなら、最優先で破壊しておかなければならないモノがある」

「それは何じゃ？」……………。

三ヶ月後――

フォースライドのトレーニングルームで組手をするレンとスーの姿があった。

スーのトリッキーな攻撃を全て見切り、反撃を決めてゆくレン。

——「何があっただよ？ 俺、死んだよな？」

——「覚醒したんじゃないよ。スピリットを取り込んでな」

レンのダッシュパンチを紙一重で避けたスー。

カウンターパンチをレンに当てようとしたが、そのカウンターパンチを交わされ逆にカウンターパンチを放たれた。

——「これからも、奴等はお前を殺そうとするじゃろう。いつ襲われるかも分からぬ」

——「冗談じゃねえ、これがアンタが言っていた俺の人生なのかよ！？」

スーの両手から青白い光の放射が放たれる。

それを掻い潜るように交わし、距離を縮めるレン。

そのレンを仕留めよと、光の放射の角度を変えるが、それを軽々と飛び越える。

——「お前には無限の力が眠っておる。じゃが、引き出す為には鍛錬が必要じゃ。強くなりたいか？」

——「……………ああ、強くなりたい！！」

スーに零距离まで近づいたレンは、光を放射する腕を掴み、脇腹に蹴りの連打を打ち込んだ。

最後の一撃で、スーは、トレーニングルームの壁に吹っ飛ばされ、光の放射は消え去った。

そのまま、壁越しに崩れ落ちるスー。

「見事じゃ。この短期間で恐るべき成長。スピリットが見込んだだけの事はある。しかも、バトルスーツを既に必要としないレベル」
タンクトップ姿のレンは、肩を廻しながら、スーに手を差し伸べた。

「やっぱりスーツを着ていると、力の負荷損失が生まれるし、何よりも微妙な空気の流れや地面から伝わる振動を感じにくいのだ。自分の力でスピリットのエネルギーを防御膜として体にコーティング出来れば、スーツなんて邪魔で仕方がない」

「さすがじゃな」

そう言っただけで、レンの手を取り立ち上がった。

「じゃが、スピリットとの完全融合を終えた今は、どんなに窮地に追い込まれようとも、もう傷も癒えんし助けてもくれんぞ。己の力次第じゃ」

「ああ、分かってるって」

フォースライドのラウンジと呼ばれるエリアでくつろぐ二人。

バーカウンターの中で、カクテルをシェイクするマスターの前で酒を楽しむ人が数人。

そのカウンターを囲むように沢山のクリスタル製のテーブルが並べられている。

三百六十度が特殊ガラスに覆われ、広大な宇宙がラウンジを包み込む。床も透明な材質で、蒼い地球が足許から覗くことが出来る。

そんな宝石を散りばめたような煌びやかな景色が大パノラマで見えると言う事で、時間帯によれば、満席にもなる。

このフォースライドは、スーの話では、生活環境エリアも存在し、人間や宇宙人も居るそうだ。

まだ、レンは人間しか見た事がない。

「なあ、スー。俺の仲間ってのはまだ現れないのか？」

レンは、コーラが入ったグラスに口を付けた。

「まだ、準備が出来ていないんじゃない。彼等の魂がな。だからリーダーが反応しない」

「リーダー？ あのドラゴンボールとかに出てくる『ドラゴンリーダー』みたいなヤツか？」

「これでもレンは真面目に質問したつもりだったが、スーには全く意味が解らなかった。」

「ワシには、お前の言っているリーダーが分からんが、他の生まれ変わりに準備が来ると、リーダーに生まれ変わりの現在地とスピリットへの道が現れるんじゃ。まあ、今度見せてやろう。」

暫くすると、レンは、神妙な面持ちで遠くの月を眺めながら口を開いた。

「俺は、スーに出会うまでの毎日が当たり前だと思っていた。この生活がいつまでも続き、学校を卒業し大学へ進学し、社会人になる。そして……」

「いつか結婚して家族を持つんじやろう」

スーは、レンの思いの果てにあらう言葉を続けた。

頷くレン。

レンの視線の先に見えていたモノ。それは『暖かい家庭』だった。

荒れ狂う酒乱っぷりで暴力に怯える家庭で育って来たレンは、暖かく家族で笑って過ごせる事を夢見ていた。

行く行くは自分がそんな家庭を作りたい。

そう強く願い、勉学に励んでいたのだ。だが……。

「そんな未来が自分にも用意されていると信じていたんだ。でも……」

「でも？」

「運命ってヤツは、全く予想もしない未来へと突き進むもんだなつて……。一体俺は、何処へ向かって行くんだろ？……。」

そうして、レンは大きな溜息をついた。

「行き先など自分で見つける事じゃ」

スーはキッパリと答えた。

その言葉に、レンは目の焦点をスーに合わせた。

「乗った船を操縦するのは己自身じゃ。行き先など誰にも分からん。行き着く果ては『残酷なモノ』かも知れん。『素晴らしきモノ』かも知れん。じゃから、今は、しっかりと己を鍛え、自身の心を研磨するのじゃ。そうすれば、おのずと見えるはずじゃ。自分の役割、目指すべき所がな」

スーの言葉のピースが、レンの心の穴に嵌った。

未来なんて、誰にも分からない、だから皆、自分自身を鍛え不足の事態に備える。

そうして、少しずつ目指すべき目標が見えてくるのだ。

レン自身、今は、大荒れの海のだ真ん中で激しく揺さぶられる船と同じだと思った。

だが、その荒波を乗り越えれば、先が見えるかも知れない。どんな先かは分からないが、乗り越える価値はある。今沈む訳にはいかない。

レンは、戦いの運命に飲み込まれてしまった自分の人生に、今になって不安と焦りと憤りしか見えていなかった。それを乗り越えられるだけの『理由』が欲しかったのだ。

「ありがとうスー。少し楽になったよ」

「そうか、良かったのお」

レンは、スーに礼を言うトラウンジを後にした。

その後姿じつと眺めるスー。

その表情はどこか不安げにも見えた。

「心が弱すぎる……か」

スーは、最初にレンが覚醒し、レントと話をしていた時の事を思い出していた。

そして、レントは、レンに関して『心が弱すぎる』と言ったのだ

った。

「レンは、素晴らしいセンスの持ち主じゃ。スピリットとの同調性も前世の5人よりもずば抜けて高く、スーツを脱いだのも一番早かった。彼が『シオンのスピリット』を継ぐ者なら、ガジャルとの戦いに小さな光が見えたかも知れん。それ程の逸材じゃ。じゃが……」

レントが言っていた

——最優先で破壊しておかなければならないモノ——

それを破壊するには、レンの心が繊細で弱過ぎたのだ。

それはスー自身も気付いてはいた。

「あいつは、冷酷になれるのじゃろうか？」

スーは、テーブルの脇から見える宇宙に目をやり、深い息を吐いた。

今日も、帰りは深夜を過ぎていた。

平屋の家に帰ってきたレンは、台所のスリガラス越しに中の様子を伺った。真っ暗で何も見えない所を見ると、既に就寝しているのだろう。

薄い木とガラス板で出来ている昔ながらの扉に鍵を挿したが、鍵は掛かっていなかった。

不思議に思い、首を傾げたレン。

「あんだだけ物騒だから鍵掛けとけって言ったじゃねえか」

そう言い、敷居を跨いだ。

薄暗い玄関へと入ったレンだったが、何か何時^{いつ}もとは違う事に気付いた。

嫌な胸騒ぎがした。不気味で邪悪な胸騒ぎだ。

レンが歩く度に軋む木目の床以外、一切の音が聞こえない。

静か過ぎる。

考えたくもない予感が過ぎる。

だが、それ以外に何が考えられるだろうか？

居間の引き戸に、ゆっくりと手を掛けたレン。

高鳴る胸の鼓動と、干上がる唾内。背筋を流れる冷たい感覚。

そして、ゆっくりと引き戸を開いた……………。

暫くして、平屋を飛び出したレンは、鬼の形相で何処かへ向かって走って行った。

硬く握られた拳から顔を出す赤い紙。

血に染まった紙切れには、近くの病院の廃墟へとレンを誘う、ゲラヴィスク教からの言葉が綴られていたのだ。

そして、その血とは、レンの家族の血だった。

言葉では表せない程の残酷な光景だった。

母親、妹、そして父親。

それぞれの四肢と頭が寸断され、ちぐはぐに連結されていたのだ。

凄まじいスピードで駆け抜けるレンが通った跡には、アスファルトに雫が残っていた。

頬から伝う雫が。

財政難で廃墟と化してしまった巨大病院の錆びた門を飛び越えたレンは、正面玄関へとやって来た。

まるで、レンを待っていたかのように、自動ドアが長き眠りから覚め、金きり音を上げながら左右に開いた。

巨大な受付ホールへと入ると、途端に館内に電流が流れる音が聞こえ、天井照明の幾つかが点灯した。

巨大なホールを照らすには不十分すぎる程の照度だ。

お馴染みの逃げるマーク、誘導灯が一際明るいグリーンの光を放つ。

ほごりまみ

埃塗れの受付カウンターにスプリングが飛び出たベンチ。ひび割れた柱や壁には、遊びで侵入した者達によるラッカースプレーアトが描かれている。

ベンチには、薬物ドラッグを使用した後の注射器が散乱していた。

「何処だッ！！ 来てやっただぜ糞野郎！！」

レンの怒声がホールに反響し、木霊した。

すると、レンの言葉に答えるかの様に、リノリウムの床を叩く、靴の音が鳴った。

柱の影から現れたローブを纏いし者。

十メートル程の距離を開け、二人が仁王立ちで向かい合う。

「貴様か？ 俺の家族を殺したのはッ！？」

「そうだ」

あっさりと答える男の太く低い声。

悲しみを表す白い仮面。

「お前は、家族を殺されたと言ったが、俺こそ大事な弟を殺されたんだ」

「はあ？」

そして、男は鼻で笑った。

「覚えてはおらんだろう。弟は覚醒したお前に殺されたんだからなあ。あの公園で」

その言葉で、レンは誰の兄なのか気付いた。

「さっさと終わらせてやろう」

男はそう言うと、フードを脱ぎ、仮面を外した。

黒いジーンズに上半身を露にした男。

細くても筋肉質で無駄のない体。

ミステリアスな雰囲気漂わせる、垂れた前髪から見せる憎しみの籠った赤い目。

男は、闘う為に生まれてきた様な完璧な肉体を持っていた。

「初めに襲って来たのはお前の弟だろ。逆恨みも大概にしろ」
体に力を込めたレンの体から白銀のオーラが吹き荒れた。
パーカーのフードが首許で靡^{なび}き、髪が逆立つ。

レンのオーラに触発され、男も全身から黒紫のオーラを噴出した。

ホール内の埃が渦を巻き、そして拡散して消え去る。

互いが、腰を下ろし、攻撃に備え腕を構える。

先に飛び出したのはレンだ。

床を一蹴りで男へと距離を詰める。

男は、迎え撃つ気で、脇を絞め、拳に闘気を纏わせた。

「正面からとは、何と間拔けなヤツだ」

向かい来るレンを弾き飛ばす程の拳を突き出した瞬間、男の後頭部に強烈な右ストレートが突き刺さった。

男の反射以上のスピードで瞬時に後ろに回りこんだレンの強烈な一撃に、玄関の自動扉のガラスを体で打ち抜いた。

激しい破壊音と共にガラスが飛び散り、すぐさま起き上がった男の髪にもガラスの破片が入り込んでいた。

額に一筋の赤いラインが垂れる。

男は、それを腕で拭うと、不適な笑みを浮かべた。

「何が可笑しいんだ？」

「いや、別に」

次の瞬間、同時に激突した二人の突き蹴りの攻防戦が繰り広げられた。

レンの拳が男の頬を弾き、男の膝蹴りがレンの腹にめり込む。
紫電を纏った男のアップアーを間一髪、身を引いたレン。鼻先を掠^{かす}ったアップアーから放たれた紫電がホールの天井を突き破り、崩れたコンクリートが雨のように降った。

それすら関係無いと言わんばかりに、二人の連打の拳が拳を弾く。

そこに降り注ぐコンクリートの破片は、拳に当り砕け散り、更に二人のオーラで掻き消された。

男の拳を掻い潜り、レンの強烈な拳が胸を打ち抜いた。

大きくバランスを崩した所へ、レンが放った金色こんじきのエネルギーが放射され、吹き飛ばされた男は、壁を何層も突き破り産婦人科エリアまで飛ばされた。

「ぐおおおおおおッ!!」

男の怒声が響き渡る。

穴の開いた壁を通り抜け、レンが距離を詰める。

産婦人科への壁を通り抜けた時、壁の脇に身を潜めていた男の蹴りがレンの顎を押し上げ、天井を突き破った。

四階まで押し上げられたレンは、拳に纏ったエネルギーを何発も地面に向けて発射した。

下の階にいる男に当る事を願う。

爆煙が舞い上がり、巻き込まれないようにバックステップするレン。爆煙に紛れて、上昇してくるかも知れないと、レンは、立ち込める煙に向かって真っ直ぐに光の玉を投げつけた。

更に吹き飛ぶ廊下。

「どうだ!!」

そう言った瞬間、レンの足許の床を突き破り、男の手が足首を掴むと強引に引きずり込んだ。

「うわッ!!」

驚き、砕け散るコンクリートの中、下の階へと落とされたレン。

状況が掴めず、慌てて、周りの景色を掴もうとしたが、死角から放たれた男の紫電がレンを包み込んだ。

全身を貫く電撃と共に中庭を突きぬけ、反対側の病棟へと飛ばされたレンは、中庭を飛び越え追って来る男目掛け、近くにあったベンチを投げつけた。

廊下のガラス窓を突き破り、飛び出すベンチを男は拳で弾き返した。

レンの顔を脇を通り越え、後方の壁にベンチがめり込んだ。そこへ突進する男。

レンは、瞬時に体勢を沈めると、頭の上を通り過ぎた男の腹にエネルギーを纏った拳を突き上げた。

綺麗に『みぞおち』（腹部の急所）を貫かれた衝撃で、男は口から唾液を飛ばし、そのまま天井を突き破った。

男が怯んでいる今しかチャンスは無いと思ったレンは、直ぐさま男を追った。

九階の入院病棟まで飛ばされた男が立ち上がる間も無く、レンの猛攻撃が男の全身を乱れ撃ちにした。

床で仰向けになり、意識が朦朧となる男。

次の一撃を男の顔面に直撃させれば、間違いなく死ぬだろう。

レンは、大きく掲げた拳に金色の光を集中させ始めた。

後編へ続く

後編

レンの傷だらけの拳に金色の光の粒が集束を始める。
この一撃で、男は死ぬ。

レンは、一気に拳を振り下ろした。
撓^{しな}る肩から、投げ出される拳が空を斬る。
大気を歪めながら、男の顔へと直進する。

——男は死ぬ。

その瞬間、レンの拳が男の鼻先で止まった。
同時に殺された家族の顔が脳裏に浮かんだ。
今なら目の前の男を殺せるだろう。だが、果たしてそれで良いの
だろうか？

結局は、目の前の男と同じ事を繰り返しているだけなのかも知れ
ない。

——復讐は新たな憎しみを生むだけ。

自分は、目の前の男と同じには成りたくない。
レンはそう思い、躊躇した拳を引いた。

だが、その行動が後に甘かったのだと思い知らされる事となる……。

意識を取り戻した男は、レンのパーカーの首許を掴むと、引き寄せ、ヘッドバットをお見舞いした。

衝撃に体を反らせるレン。

更に、肘撃ちを胸に打ち込まれ、隣の病室の壁を突き破った。

男は、ゆっくりと立ち上がると、大きく深呼吸をしてからまた不適な笑みを浮かべた。

「ふふふっ。せっかく俺を殺せるチャンスをやったのになあ、惜しい事をしたな。まあ、ギリギリで防いでいたがな」

レンは、折り重なるベッドのスプリングマットを押しつけ、立ち上がった。

「どう言う事だ？」

「ちょっと力を使えるようになったからと言って、本気で俺に勝てると思っていたのか？」

口元を綻ばせる男に対して、レンは言葉が詰まった。

負けると言う事は考えてはいなかったし、戦いの流れからして「勝てる」と、心の中で勝利を確信しつつあったからだ。

男は、大きな笑い声を上げた。

嬉しそうな笑顔を見せつける。そこには余裕すら感じられた。

「さあ、絶望に満ち、朽ち果てる顔を俺に見せてくれ」

レンが、男の声を聞き取った瞬間、顎に強烈な衝撃が伝わった。

先程までとは比べ物にならない程に重く、鋭い衝撃。

視界が、縦のラインを残し、訳も分からないまま幾層ものコンクリートを貫いた。

——息が出来ないッ！！

脳が揺さぶられ、神経回路が混乱を来たし、呼吸困難に陥ったレン。

遠のく意識が回復し掛けた時には、屋上をも突き破り下弦の月を全身に浴びていた。

耳元で風がうねり、無重力状態で腸が引き上げられる。

数十メートル下に病院の屋上が見えたが、次の瞬間には首許のパーカーを男に握られていた。

そして、そのまま屋上目掛けて放り投げられたレン。

凄まじいスピードで空を掻き分け、病院へと直撃した。
屋上の床に衝突した際のダメージなど感じる間も無く、幾層もの
コンクリートがレンの体力を削って行った。

再び、一階の受付ホールへと戻ってきたレン。

リノリウムの床が大きく凹み、その中で蹲^{うずくま}る。

レンは震えていた。

「あんなの……勝てる訳ない。俺、本気であんなのと戦ってたのか？
これから、あんな奴等と戦って行かないといけないのか？」
レンの服を掴んだ男は、ゆっくりと引き上げると、みぞおちに渾
身の一打を突き込んだ。

口から飛び散る鮮血。体がくの字に曲がり、内臓が悲鳴を上げる。

そして、もう一発。更に、もう一発。

レンが来ているパーカーがダメージに耐えれずに破れ、そのまま
シャツ一枚のレンは、受付カウンターに突っ込んだ。

埃を巻き上げ、レンに降り注ぐ。

口から強制的に吐き出された血が、レンの顔面を真っ赤に染め、
流れる涙が、血を洗い流す。

肩を震わせ、不規則な呼吸と共に、泣き声を響かせた。

「何だ？ もう終わりなのかよ」

男は、肩を廻し、首を捻りながら間接を鳴らした。

「さあ、殺したい所だが、セラス様の話じゃあ、お前を殺してはな
らんってよ。残りのスピリットを揃えて貰わないと扉が開かないそ
うだ。不便な話だ」

男は、ゆっくりと踵を返した。

「俺はジークス。今晚のスパリングが挨拶程度だ。次に会う時に
はもっと楽しませてくれよ」

そう言った時、最後の力を振り絞って飛び掛ったレンのエネルギー

ーの塊がジークスの顔面に直撃した。

強烈な閃光を発し、爆発したジークスの頭部。

ふらつく足で、立つレンだったが、爆煙の中から現れたのは怒りに顔が歪むジークスだった。しかも無傷だった。

「クソッ……終わったか」

「お前……もう我慢できねえ。殺してやる！！」

ジークスは、怒りに紅潮させた顔で黒紫のオーラを身に纏い、レンの許へと歩み寄る。

「スピリットは、お前の死体から抜き取れば良い。そして、片っ端から人間を殺せば、生まれ変わりも死に、ガジヤル様は時間切れで復活するッ。それで良い！！」

暗黒と渦がジークスの拳に集束し、振り下ろされる。

レンは死を覚悟した。

恐怖から目を瞑る。^{つむ}

だが、ジークスの拳はレンには届かなかった。

不思議に思い、目を開いたレン。

目の前に写ったのは、壁にめり込むジークスと、レンの前で仁王立ちをしていたスーだった。

「スー……」

レンの言葉に反応せず、スーは、後方にスフィアを投げ飛ばした。

光の魔方陣が、リノリウムの床に光のサークルを作り上げた。

すると、スーは、レンの胸ぐらを掴み上げると、サークルの中に投げ込んだ。

「おいッ！！ 爺さんッ！！ 何すんだよ！？」

ゆっくりと起き上がるジークス。

そして、レンが最後に見たのは、肩越しに笑みを見せたスーの最

後の笑顔だった。

瞬時にフォースライドに飛ばされたレン。

転送台の上で泣き崩れる。

「何でッ!? クソおおッ……」

レンは、転送台から降りると、研究員の一人に頼み込んだ。

「お願いします。俺を直ぐに送り返して下さい。そうじゃないと、爺さんが……スーがッ……」

「すまない。転送は、帰る分には関係無いんだが、送るには距離に
応じた回復時間が必要なんだ」

「じゃあ、あとどれだけ待てば良いんだ!？」

研究員は申し訳なさそうに答えた。

「今さっき、スー様を送ったバカリだ。最短でも20分は必要だ」
「そんな……」

レンは、その場で膝から崩れ落ちた。

病院の受付ホールに光のサークルと共に現れたレン。

だが、そこには誰の姿もなく静まり返っていた。

スーの姿を探すレン。

「おいッ、スーッ!!」

すると、柱の影から横たわるスーの両足が見えた。

慌てて駆け寄るレンだったが、その足を見て驚愕した。

何と、上半身が消えていたのだ。

「そんな馬鹿な……。スーは？」

辺りに視線を駆け巡らせる。

ジークスの姿も無い。

柱に壁が、レンが消える時と全く変わらず、損傷していない所を見ると、勝負は一瞬で決まったようだ。

レンは、広いホールをくまなく歩いた。

すると、受付カウンターの中にスーの上半身が転がっていた。

引き裂かれた胴体からは、科学素材の内臓やケーブルが抜け出し、適度に暖められていたオイル剤が水溜りを作っていた。

慌ててスーの上半身を抱え寄せる。

「おい、大丈夫か！？ スー！！ 返事をしてくれよ」

「れ……ん……」

何と、スーはまだ生きていた。

しかし、その声は、今までのスーの声ではなくスピーカーが壊れたような機械的で途切れ途切れだった。

そして、スーは何かを伝えようとした。

「セラスの器……」

「セラスの器？」

「セラ……スのう……わを破壊……しろ」

レンは、途切れ途切れの言葉を必死に繋ぎ合わせて聞いた。

「セラスの器を破壊するんだな。分かったからフォースライドへ戻ろう。キュアラクトで助かるかも知れないだろ！？」

だが、スーは顔を横に振った。

顔を横に振るとギアの音が首から唸るように聞こえた。

「お……かに……け……」

「はぁ？ 何言ってるかわかんねえよ」

「お……さ……い……」

スーの眼球の中の赤い光が点滅している。

「たの……だぞ……」

そう言い残し、スーは死んでしまった。

レンを助ける為に、希望を繋ぐ為に、自らを犠牲にしたのだ。

「これが、アンタの行き着く先なのかよ……役割なのかよ……あんまりじゃねえかッ!!」

レンは、スーの遺体をフォースライドへ持ち帰ると、救急治療室へと運んだ。

キュアラクトと呼ばれる直立した円形のカプセル治療機器が立ち並ぶ研究室で、近くにいた研究員へ助けを求める。

「すみません、スーを治して下さい。お願いします」

軽くパーマの掛かった金髪の女は、スーの遺体を近くのテーブルの上に置いた。

「ヒール博士が居たとしても、死んだ人間は生き返らせないのよ」

「ヒール博士？」

「この責任者よ」

暫くして、女性の研究者がベンチに座るレンへと近づいて来た。

「ゴメンなさい。スーさんの『脳』の役割を担っているエレメント回路が完全に焼け焦げているわ。だからどうしようも出来ないの……」

「そんな……」

翌日、レンの自宅の周りはパトカーが止まり、警官や刑事が囲んでいた。

黄色いテープの向こう側で、担架に乗せられ、運び出されるレンの家族の遺体。

ただ一人生き残ったレンは、直ぐ様事情聴取を行われた。

犯行時刻のアリバイも問われたが、そこは、公園に居たと嘘を付いた。もちろん立証できる物も無かったが、レンが殺したと言う証拠は何も無かった。

もう、自分には家族と呼べる者が誰も居ない。

脳裏に甦る家族の笑顔が、レンの掌に涙を落とした。

スーの葬儀は、レン一人で行った。
長く生き、知り合いも居なくなってしまうていたようだ。
本人が以前に、自分よりも先に死んで行く者を見たくないとの事から、自ら関係を持つとは思わないと言っていた。それ故だとしても、寂しかった。誰も見送ろうとする者がいない事実が。
それが、永遠の命を持つ者の定めなのかも知れない。
命の流れを感じて欲しいと思い、レンは海の底にスーを沈めた。
「じゃあな。スーちゃん」

フォースライドのラウンジで、一人で椅子に座っていた。
もう、三時間も宇宙を眺めていた。
宇宙を眺めていても何も始まらない。だが、スーが長い間見てきたこの景色を見続けていれば、スーの考えや気持ちが少しでも分かるかも知れないと、淡い期待を寄せていたのだ。
「アンタの仇は絶対に取ってやるからな。見てくれよな」
レンは、視界の一番奥に見える星に向かって語りかけた。

その時、二人の男が近づいてきた。
一人は黒髪の長髪、一人は逆立った茶髪の男。

「君が、寺村 蓮君かい？」

「そうだけど……」

レンは、警戒しながらも返事をした。
何故、自分の事を知っているのか？

「スーさんから、君の事を頼まれてね」

「スーから？」

「ああ」

長髪の男は、レンの向かい側の椅子に座ると、口を開いた。

「これからは、俺達が君をサポートする」

「で、あんた等何者？」

すると今度は、茶髪の男が答えた。

「俺達は、ファントムソルジャーだ」

「何それ？」

「元々は、邪悪な宇宙生物を退治するのが仕事だが、今は地球上で活動している。闇に潜む幽霊や妖怪を退治し、人々を救う仕事だ。スーさんがそこで力と心を磨けだってさ」

それがスーの求めている事なら、今のレンには断る理由は無かった。

その先に何が待っているのか？

それは誰にも分からない。だけど、進まなくては何も分からない。

沈んでいる今だからこそ、悲しみに暮れている今だからこそ、その心に打ち勝つ意味がある。

スーが最後に言い残した謎の言葉も気になる。

まだ戦いは始まったばかりなのだ。

「わかった。やるよ」

三カ月後――

「何やねんコイツ!？」

「怖いって、嫌やあ!!」

路地裏で、目の前の不気味な人間に恐れをなす関西弁のカップル。

虚ろな瞳に、座っていない首。垂れ流れる唾液を吐き散らし、もつれた足で力なく襲い掛かる男。

その男が、大阪弁の男に襲いかかろうとした時、空から降りてきたレンが、手に持っていた剣で切り伏せた。

頭の天辺てっぺんから股に掛けて一直線に裂ける男が、アスファルトに崩れ落ちる。

「大丈夫か？ 怪我は無いか？」

レンは、二人の体に目をやり、心配した。

男は、彼女であろう女の手を掴み抱き寄せながら立ち上がる。

「無いけど、お前何者なにもんやねん？」

男の質問にレンは、手に持っていた剣を、手首に嵌めているブレスレットへと消し去ると答えた。

「俺は、寺村 蓮だ」

ニコリと笑うレンに対し、男も答えた。

「そうか、俺はリュウセイ。『天野 流星』（あまの りゅうせい）や」

終わり

スーが言い残した「セラスの器」とは？

そしてレンとリュウセイの関係が明かされる。

「HIKARI（光） 特別編 エピソード0.5 〈流星の涙〉」
を経て本編に繋がる。

乞うご期待下さい。

後編（後書き）

H I K A R I（光） 本編もよろしくお願いします。

レンが、サブレギュラーとして登場する「ヒーローは小学生」シリーズもよろしくです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0933n/>

HIKARI（光） 特別編 エピソード0 ～初めの一人～

2010年10月8日14時33分発行